

## H29地域協働研究（ステージⅠ）

## H29-Ⅰ-04「一関における発達障がい児に対する支援システムの課題と社会資源の連携に関する調査研究」

課題提案者：NPO法人子育て支援いっすね

研究代表者：社会福祉学部 佐藤匡仁

研究チーム員：齋藤昭彦（社会福祉学部）、鈴木和子（NPO法人子育て支援いっすね）

一関市内の保育所・幼稚園・認定こども園・小学校・中学校において、発達特性及び発達障害を有する幼児・児童・生徒のコーディネートを担当する教職員を対象に、一関に必要な発達障がい児に対する機関間が連携した支援システムの在り方について調査した。具体的に、園と児童発達支援事業、小中学校と放課後等デイサービス事業所等との連携方法、支援計画等の共有の実態、支援システムについての教育・福祉・医療・心理・労働等、機関間の連携における課題（願望・不安・要求・問題点等）である。その結果、小学校では54.8%の学校で、中学校では14.3%の学校で、放課後等デイサービス事業所を利用していた児童・生徒がいた。学校と事業所との情報交換の取り組みとして、「事業所職員の学校訪問や授業見学」、「送迎時の体調等の伝達」、「ケース会議や相互の指導計画の交流」、「事業所から家庭への連絡ノート」などが行われていた。

### 1 研究の概要（背景・目的等）

一関市では、発達障がい児に対する支援が、保健・福祉サイド、教育サイドともに、全国的にも早い時期から意欲的に取り組まれてきた。しかし、近年の行政機構改革や地域資源の増加と共に、継続的な支援が滞るケースや、円滑に接続されないケースが生じるなど、“一関システム”本来の目的が十分機能しているとは言い難い課題が指摘されるようになった(例えば、支援に必要な情報が得られない、担当者同士の知識量や経験の差に左右されるなど)。このように、児童発達支援や放課後等デイサービスは増えてきているが、現行システムの中での位置づけが不明確なままであり、地域資源が増えることは良いことにも関わらず、支援の質の向上に寄与する機関間連携は思うように進んでいない。訪問される園や学校でも、互いの立場を理解して対応できているとは限らず、必要な支援に支障をきたす現状がある。

そこで、現行システムの課題を抽出し、課題解決に必要な方法を分析・検討する。具体的には、園、療育機関、学校、そして放課後等デイサービス間の引継ぎをはじめとする連携システムを円滑に機能させるために、①相手に求めたい内容・情報・サービス、②提供できる内容・情報・サービスと提供できない内容・情報・サービス等を整理する。その上で、必要最低限の支援がどこでも同じように受けられるようにするための、現場で実行可能なユニバーサルデザインについて分析・検討を行う。加えて、放課後等デイサービスが行う保育所等訪問支援をどのように位置づけながら地域のシステムとして構築していけるか検討する。

これらの結果を“一関システム”に反映させ、児童発達支援や、放課後等デイサービスに求められる役割と機能を明確にすることが、切れ目のない継続的な支援の実現に繋がりと、りわけ、一関市に居住する発達障がい児の地域における健全育成に繋がっていくことが期待できる。

### 2 研究の内容（方法・経過等）

2018年2月～3月にかけて、一関市内の全ての小学校と中学校を対象に、質問紙調査を実施した。回答者は、特別支援教育コーディネーターの教師、もしくはそれに相当する方1名とした。

Table 2 小学校と事業所間の情報交換の取り組み（代表的な自由記述）
<ul style="list-style-type: none"><li>・事業所職員が学校訪問で来校時、授業参観をしていただき、その後指導力向上等、共有のためのケース会議を行った。</li> <li>・送迎車にその日の体調や食事量、運動量について伝達をしている。</li> <li>・放課後デイサービス及び保育所等訪問の機会もあり、ケース会議を行った。その際、指導計画を交流している。</li> <li>・事業所から家庭への連絡ノートを読ませてもらっている。</li> <li>・学校の週ごとの予定（対象児童の学年のもの）を渡している。</li> <li>・教員が事業所に見学し出席した。</li> <li>・気づいた事がある時連絡ノートに記入する。</li> <li>・何かあった際、電話で情報をやりとりする。</li></ul>

放課後等デイサービス事業所で作成した障がいのある児童の「個別の支援計画」を見たことがあるか尋ねたところ、「ある」と回答した小学校が3校(9.7%)、「ない」と回答した小学校が25校(80.6%)、無回答の小学校が3校(9.7%)であった。

また、小学校が作成する「個別の指導計画」や「個別の教育支援計画」について、「全員に作成している」「一部の児童に作成している」場合、内容について、事業所と情報交換することはあるか尋ねたところ、「全員ある」1校(9.1%)、「多くの児童にある」10校(0%)、「少しの児童にある」2校(6.5%)、「ない」17校(54.8%)、「無回答」11校(35.5%)であった。

②中学校調査

一関市内の中学校全18校に発送し、回収数は14(回収率77.77%)であった。

平成29年度に、放課後等デイサービス事業所を利用した生徒がいないと答えた中学校は、2校(14.3%)、いないと答えた中学校は、12校(85.7%)であった。利用生徒のいる中学校のうち、事業所との間で子どもの情報のやり取りに課題があると答えた学校は、0校(0%)あった。

中学校と事業所との間で、情報交換のために行っている取り組みがあるか尋ねたところ、あると回答した中学校は4校(28.6%)、ないと回答した小学校は9校(64.3%)、無回答1校(7.1%)であった。情報交換のために行っている取り組みとして自由記述回答の代表的な内容をTable3に挙げる。
「情報交換する時間の確保」、「事業所での児童の様子の把握」、「下校時刻の確実な共有」、「学校と事業所での学習のしかたの違いに関する保護者の悩み」、「進路についての相談内容の共有」などが指摘された。

Table 1 小学校と事業所間の情報のやり取りの課題（自由記述①）
<ul style="list-style-type: none"><li>・情報交換する時間を確保すること（朝晩時間等の限られた時間でやっている）。</li> <li>・事業所での様子を具体的に知ること（児童の様子を見に学校に来た時に多少はくことはできた）。</li> <li>・児童の下校時刻迎えが遅れ、児童を待たせてしまうことがある。</li> <li>・学習のしかたに多少違いがあるようで保護者を悩ませることがある。</li> <li>・学校での様子を伝えたり、事業所の活動や指導計画を開いたりなど、情報交換する時間がとれない。</li> <li>・学校での様子を伝えたり、事業所での活動やそれに伴う本人の課題等（良かった点も含む）を情報交換する時間 がとれない。</li> <li>・情報交換自体を行っていない。</li> <li>・児童の態度などについて親と話したことを学校にも知らせてほしかった。</li></ul>

小学校と事業所との間で、情報交換のために、行っている取り組みがあるか尋ねたところ、あると回答した小学校は11校(35.5%)、ないと回答した小学校は17校(54.8%)、無回答3校(9.7%)であった。情報交換のために行っている取り組みとして自由記述された回答の代表的な内容をTable2に挙げる。「事業所職員の学校訪問や授業見学」、「送迎時の体調等の伝達」、「ケース会議や相互の指導計画の交流」、「事業所から家庭へ

の連絡ノートの閲覧」、「学校の週予定の配布」、「教員の事業所訪問や活動見学」、「連絡ノートへの記入」、「電話での情報のやりとり」などが指摘された。

Table 2 小学校と事業所間の情報交換の取り組み（代表的な自由記述）
<ul style="list-style-type: none"><li>・事業所職員が学校訪問で来校時、授業参観をしていただき、その後指導力向上等、共有のためのケース会議を行った。</li> <li>・送迎車にその日の体調や食事量、運動量について伝達をしている。</li> <li>・放課後デイサービス及び保育所等訪問の機会もあり、ケース会議を行った。その際、指導計画を交流している。</li> <li>・事業所から家庭への連絡ノートを読ませてもらっている。</li> <li>・学校の週ごとの予定（対象児童の学年のもの）を渡している。</li> <li>・教員が事業所に見学し出席した。</li> <li>・気づいた事がある時連絡ノートに記入する。</li> <li>・何かあった際、電話で情報をやりとりする。</li></ul>

放課後等デイサービス事業所で作成した障がいのある児童の「個別の支援計画」を見たことがあるか尋ねたところ、「ある」と回答した小学校が3校(9.7%)、「ない」と回答した小学校が25校(80.6%)、無回答の小学校が3校(9.7%)であった。

また、小学校が作成する「個別の指導計画」や「個別の教育支援計画」について、「全員に作成している」「一部の児童に作成している」場合、内容について、事業所と情報交換することはあるか尋ねたところ、「全員ある」1校(9.1%)、「多くの児童にある」10校(0%)、「少しの児童にある」2校(6.5%)、「ない」17校(54.8%)、「無回答」11校(35.5%)であった。

### ②中学校調査

一関市内の中学校全18校に発送し、回収数は14(回収率77.77%)であった。

平成29年度に、放課後等デイサービス事業所を利用した生徒がいないと答えた中学校は、2校(14.3%)、いないと答えた中学校は、12校(85.7%)であった。利用生徒のいる中学校のうち、事業所との間で子どもの情報のやり取りに課題があると答えた学校は、0校(0%)あった。

中学校と事業所との間で、情報交換のために行っている取り組みがあるか尋ねたところ、あると回答した中学校は4校(28.6%)、ないと回答した小学校は9校(64.3%)、無回答1校(7.1%)であった。情報交換のために行っている取り組みとして自由記述された回答の代表的な内容をTable3に挙げる。

Table 3 中学校と事業所間の情報交換の取り組み（代表的な自由記述）
<ul style="list-style-type: none"><li>・小学校まで「いっすね」の支援を受けていた生徒がかわかって「いっすね」の職員の方が来校され、その後の経過について情報交換を行った。</li> <li>・指導法・援助法等の共有のためのケース会議を行った。</li> <li>・教員が事業所に、見学し出席した。</li> <li>・送迎車にその日の体調や連絡事項を伝達している。</li> <li>・情報交換が必要な生徒がいれば、事業所の方が、学校を訪問したり、電話をしたりして、情報を交換している。</li></ul>

放課後等デイサービス事業所で作成した障がいのある児童の「個別の支援計画」を見たことがあるか尋ねたところ、「ある」と回答した中学校が0校(0%)、「ない」と回答した中学校が14校(100%)であった。

また、中学校が作成する「個別の指導計画」や「個別の教育支援計画」について、「全員に作成している」「一部の児童に作成している」場合、内容について、事業所と情報交換することはあるか尋ねたところ、「全員ある」0校(0%)、「多くの児童にある」10校(0%)、「少しの児童にある」1校(7.1%)、「ない」8校(57.1%)、「無回答」5校(35.7%)であった。

(2)一関における発達障がい児に対する支援システムの連携における課題（願望・不安・要求・問題点等）

### ①小学校

一関における発達障がい児に対する支援システムについて、教育・福祉・医療・心理・労働等、機関間の連携において、課題（願望・不安・要求・問題点等）を尋ねたところ、自由記述された回答の代表的な内容をTable4に挙げる。

Table 4 小学校と機関間の連携における課題（代表的な自由記述①）
<b>福祉との連携</b> <ul style="list-style-type: none"><li>・生活保護世帯、一人親世帯、子どもの孤食、孤食、朝食をとらない、虐待、ひきこもり、不登校などと、発達特性や発達障がいを有する子どもが重複している事例と、家庭内矛盾に対する取り組みを、福祉サイドと役割分担して、連携して取り組めたい。</li> <li>・放課後等デイサービス事業所が町内唯一の施設であり、困る、もっと多くあつたらいいと思う。事業所が複数あつてはいいと思う。大東町でもあつたらいいと思う。放課後デイサービスについての知識があまりないように思う（支援を要する子ども継続保育を利用している）。</li></ul>

医療との連携
<ul style="list-style-type: none"><li>・受診に至るまでの学校での児童の様子（観察）をお伝えしたいのだが、どのような方法で伝えたらよいか知りたいです。</li> <li>・助言をいただきたいので、今の連携で大丈夫と思うが、もっと深く関わっていただきたいのなら、実際に本校の学校での様子を観察していただきたいのが、一番よい連携かなと思う。</li></ul>
心理との連携
<ul style="list-style-type: none"><li>・ベアレントトレーニングが必要と思われる保護者が多いです。その際、どこで、どのように行っていたかの、また、その手続き等を知りたいです。</li> <li>・学校と家庭との間で認識のズレがある場合（給食で問題をとらえていまい）に第三者的な立場で関わりながら、働きかけしてほしい。</li></ul>
その他
<ul style="list-style-type: none"><li>・専門チームの利用まではいいが、個別の支援が必要な児童が増えているように感じる。支援がなつた場合は個別に不安を感じる。また、早期に対応していくことで、児童が、学校に適応していくように思うが、様子を見てからという親が多く、いらだちを感じる。大学以前にまた入学してからも、できるだけ早く対応できるように今後検当が必要かと思う。</li> <li>・一関市の専門チームのメンバーは教員がほとんどで、学校を卒業しての対応となるため、時間や内容等限界がある。専門的な資格を持った方が、常時、相談や検査に対応できるように機関やスタッフが欲しい。</li></ul>

### ③中学校

②小学校と同様に、一関における発達障がい児に対する支援システムについて、教育・福祉・医療・心理・労働等、機関間の連携において、課題（願望・不安・要求・問題点等）を尋ねたところ、自由記述された回答の代表的な内容をTable5に挙げる。

Table 5 中学校と機関間の連携における課題（代表的な自由記述①）
<b>福祉との連携</b> <ul style="list-style-type: none"><li>・不登校の生徒について、発達障がい等が関わっていても、なかなか家庭との連携が難しい場合が多いように思います。定期的な会議（連絡会）を市や学校が主催し、地域の福祉機関と学校の連携がとりやすい環境がもっと整えられるとよいと思います。</li> <li>・福祉機関との連携をスムーズにするため、行政の各機関と詳しく、情報など交換、調整を行って下さる。スクールソーシャルワーカーが各校にいてほしい。</li></ul>
医療との連携
<ul style="list-style-type: none"><li>・医師機関とのやりとりは難しく生徒を通して病院の方向を押しはかる状況がある。方針等をやりとりしたり、ちよっとした相談ができれば、非常ありがたいと思う。</li> <li>・新規で受診するときの伝え方、服装している場合の対応などの変化の情報は、継続受診しているときの情報の共有などの様式を定めることによって、集団の中での過ごし方の情報の伝え方がスムーズいったらいい。助言をもらいたければ、時も情報がやりとりされることによってスムーズになるといい。</li></ul>
心理との連携
<ul style="list-style-type: none"><li>・心理療法の勧め方、診断結果をどのように活かしていくか等のアドバイスなどを専門チームからいただけたらいいと思います。</li> <li>・情報共有してもらえると助かる。保護者の理解が課題である。</li></ul>
その他
<ul style="list-style-type: none"><li>・不登校の生徒への対応は、どうしても学級担任やその学年担当のものになってしまい、不登校＝生徒指導担当という風になりがち。発達障がいや要因となっていると思われるときに、特別支援担当としてどう関わりを持つかきか、いつも迷います。</li> <li>・自分も専門チーム員として他校で検査等をすることがあります。自分の学校での業務と兼務なので、時間によってはとても大変なときもあり、重く合わぬと感じることもあります。</li></ul>

### 4 今後の具体的な展開

次年度は、学校との連携先(放課後等デイサービス等)を対象に同様の内容で調査し、調査結果を横並びにして連携の課題を分析する。両者の要望と提供可能な内容・情報・サービスを整理し、一関システムへの提言をまとめていく。

### 5 謝辞

調査の手配にご協力くださいました一関市教育委員会、回答にご協力いただきました小学校・中学校の先生方にここに記して厚くお礼申し上げます。